

シンポジウム

「幸福」を考える——東洋、西洋、実証研究

はじめに

伊集院 利明

幸福が人間にとって重要な価値であることは論をまたない。そして、幸福は、近年、実証研究においても、哲学においても重要なテーマとなっており、特に幸福に関する実証研究について言うならば、その必要性は注目を集め、また、収入と幸福との関係が、従来考えられていたほどは強くないことをはじめとした諸成果は（通勤時間と幸福との関係といったようなものも含めて）、世間においてもかなり知られるようになってきている。

しかし、幸福についての研究が本格化したのは、比較的最近のことである。実証研究について言うと、「主観的幸福」研究を確立したディーナーや、心理学者としてはじめてノーベル経済学賞をとったことで知られるカーネマンの研究、また、「ポジティブ心理学」の動向が注目されてくるようになるのも、1980年、90年代以降のことである。

哲学について言うと、西洋哲学は幸福を古代から主題的に扱ってきていないわけではない。例えば、古代ギリシア哲学において、*eudaimonia*（多くの場合、「幸福」と訳される）は、プラトン、アリストテレスなどの諸著作における重要な主題であった。またアリストテレスの *eudaimonia* 論は、現代の心理学のリフの理論などにも重要な影響を与えていることが知られている。それでも、幸福が哲学界全体での議論の主題となって組織的な形での議論が本格化するのには、比較的最近のことである。また、幸福についての古代、中世等の思想家の論が、近年の哲学的幸福研究と、同じ問題について論じてきたと言えるのかすら、はっきりとしない。例えば、今しがたふれた、古代ギリシアの哲学者たちが *eudaimonia* の名のもとに扱ってきたものが、近年 *well-being, happiness* として扱われているものとのような関係にあるのかは、論争の対象となっている。

こうした中で、本シンポジウムは、幸福研究をさらに推進するための方向性を模索することを狙いとする。

本シンポジウムの最大の特徴は、一つの分野の専門家のみによる会では決してなく、登壇者が様々な分野の専門家により構成されていることである。本シンポジウムに登壇した5人の登壇者のうち、一人（緒方准教授）は、東洋思想、文化の研究者であり、一人（伊集院）は哲学研究者であり、一人（樋口名誉教授）は心理学者であり、一人（武田教授）は社会心理学者であり、一人（小野教授）は、西洋中世史の研究者である。5人のうち2人（緒方、伊集院）が思想系、2人（樋口、武田）が実証研究系、1人（小野）が史学系であり、また5人のうち2人（緒方、小野）が歴史的研究、3人（樋口、武田、伊集院）が理論的研究といろわけすることもできる。こうした多岐にわたる諸分野の専門家を集めたことが、本シンポジウムの最大の狙いをあらわしている。幸福の現在の研究状況を進展させていくために、

諸学間の連携関係がとりわけ重要になるであろうと考えられるからである。

本シンポジウムにおいて、そうした連携は、特に二つの方向から追及されている。

一つが、現在進行形の実証研究および哲学研究と、より、古い時代の幸福感についての研究との間の連携である。古代ギリシアの哲学思想は、現在進行形の哲学的幸福研究だけでなく、実証研究にも大きな影響をおよぼしているが、しかし、先にも述べたように、古代の思想と現在の諸説との関係は、必ずしも明確に解明されているとは言えない。それ以上に、西洋古代を超えたより広い時代、文化、地域の思想への参照が、現在進行形の研究の進展にとってどれだけの起爆剤となるかを探ることは、あまりなされていないのが実情である。緒方教授、小野教授の発表は、それぞれ、中国思想・文化、西洋中世において、幸福がいかにとらえられたかの重要な局面を鮮やかに描き出しており、現在の我々の幸福感を相対化してとらえる視点を提供するためのきわめて有益な基盤を提供している。

もう一つが、哲学・思想と実証研究との連携である。両者間の連携は、世界に目を向けるならば、それなりに模索されてきてはいる。しかし、その模索は、公平に言って、まだかなり散発的なものにとどまっている。本シンポジウムはその一層の発展の契機となることを企図している。一口に実証研究と言っても、その展開はきわめて多様である。樋口教授、武田教授の発表は、その多様な展開の豊かさを示し、多分野の連携のためのきわめて有益な視点構築のための窓口を提供してくれており、たいへん啓発的である。

伊集院自身は、本シンポジウムの、私以外の発表者の発表内容から、また、発表後のそれぞれの論者との質疑応答のやり取りから、自身の研究推進上のきわめて有益な示唆を得ることができた。他分野との連携が有益であることは予想はしていたものの、予想以上に実りの多い成果を実感することができた。本報告書の多くの読者が、こうした、分野間の垣根を超えた相互刺激によって、実り多いものが得られることを実感していただければ、幸いである。